詳論する著作を刊行予定として公表している。[26] しかし、デュルケームの知識社会学はPickerlingのいうように「分類の未開形態」において扱われたものだけにつきるのであろうか。デュルケームの知識社会学についてはV. M. Worsleyがすでに1956年に発表したものがある[27]ほか、G. Namerの研究[28]も「社会学年報」に報告されている、ほかP. Vogtの研究などもある。ところが、Pickerlingの上記論文の中には第一のP. M. Worsleyのものも G. Namerの報告については何の言及もなされていない。それだけではなく、G. Namerのものについては参照文献リストにもふれられておらず、まったく黙殺の形である。しかし筆者などはこのデュルケームの知識社会学の問題についてはG. Namerの論文を最初に知ったのである。今から15年ぐらい前のことである。この論文がフランスでは戦後戦前の名称を継承して毎年刊行されている社会学年報であり、 G. Namerのそれもデュルケーム復興の声が研究者の間からも聞かれた時期のものである。見解の相違はともあれ、この論文が黙殺されたことは合点がいきかねるのである。G. Namerによると、デュルケームの知識社会学はたんにM. Mausseとの共同執筆の「分類の未開形態」だけに限られているわけではなく、その発端は「社会分業論」にはじまっているのである。G. Namerはこの問題はPickerlingのように「宗教生活」との対比だけでなく、もっと広い視野の下にとらえられている。筆者も問題のとりあげ方はまさにそうであるべきであると考える。そこで次にG. Namerの見解を検討してみることが問題考察の次の段階となってくる。

Ⅲ

まずG. Namerはデュルケームおよびデュルケーミアンとよばれる協力者の活動を社会学年報刊行から1914年までの第一期を年報の第二期のM. Mausseを中心とする協力者たちと区別し、第一期のものに限定するのであるが、デュルケームの学位論文であった「社会分業論」の中に知識社会学的接近の第一歩が見られるというのである。[29] Namerは社会分業論の第二版序文の中の「実際各先進社会は成員たる個人が確立した科学的真理を自分のものとして取りいれることによりその知性を発展させることをますます義務とみるようになる。この義務は一部の社会では非常に強く感じられるようにより、それは世論により承認されるだけでなく、法律によっても承認されるようになる」という一文を引用して、科学の社会的必要の説明として、社会が有機的分業に進んでいく構造的変化をあげるのであるが、[30] 知識の拡大普及が現在の先進国社会がその存立條件をみたすための不可欠となることを意味している。つまり、科学に導かれた知性が集合生活の過程の中において増大していくことの不可欠が強調され、デュルケームにおいて知識社会学の出発点となったのは集合意識conscience collectiveについての社会学ではなく、表象の体系Système de repsésantationsについての社会学だったのである。従って集合意識ではなくて、成員のもつ知識が重視されたのである。この集合意識と成員のもつ知識としてのconscience socialeは別のもので、デュルケームはこの点を明確に区別していた。なぜなら前者は人間の感情性affectivitéに依拠するが、社会的意識は一定の制度を知識社会学の関係領域（lieu interessant）としているからなのである。そして集合意識は社会意識のすべてではなく、その一部にすぎなくなるのである。先進社会においては一定数の制度が知識社会学の問題領域となると規定されている。だから集合意識と表象の体系とは区別されなければならないのである。[31] こうして、工業化社会においては政治、法

26) W. S. F. Pickerling, *op. cit.* p. 70においては*Durkheim's Sociology, of Knowledge, A stndy* of Representationの刊行が予告されている。
27) P. M. Worsley, 'Emile Durkheim's theory of Kowleade, *Sociological Review.* 4 (NS). 1956 pp. 437–62.
28) G. Namer, 'La sociologie de la connaissance chez Durkheim et chez durkheimiens'. *A. S.* 28 : p. 41–77
29) Gérard Namer, 'La Sociologie de la connaissance chez Durkheim et chez durkheimiens' *Année Sociologique* 22, 1977. *ibid*, p. 42
30) *Op. cit.*, p. 42
31) G. Namer, *op. cit.*, p. 43